

田園俳人松本椿年の生涯と作品(七)

——昭和五十年代後半以降(超高齢期から終焉期)のライフイベントと作品——

宮 川 充 司*

俳人松本椿年(本名松本傳次郎)は、明治二十年(一八八七)七月七日七夕の日に静岡県駿東郡中嶋村(現在の静岡県駿東郡小山町中島)の旧家に生まれ、昭和六十一年(一九八六)二月八日に生涯を閉じた地方俳人である。十歳の頃から、俳句の宗匠でもあった父親から俳号と俳句の手ほどきを授けられ、その父親の没後(大正十一年(一九二二)十二月)から最晩年満九十八歳で生涯を閉じる臨終間際まで、ほぼ一世に亘る日本社会の激動期を、農村の中で生活に密着した句作とともに生きた俳人である。宮川(二〇一六)は、この俳人の誕生から死に至るまでの個人史(年譜)を、残されている資料や子孫の記憶から試作した。この俳人の作風は、農作業の傍ら体験する自然の観察や生活の中で出会った出来事や感動を、そのまま作品とする生活俳句が真骨頂であり、部屋の中で想像と言葉の技法だけで作句する俳人とは一線を画したものであった。また、宮川(二〇一七)は、明治大正から第二次世界大戦頃までの作品とライフイベントについて分析し、その間の出来事と作品を整理した。特に俳誌は月刊を基本とする所から、「習作期」と「投句休

止期」と名付けた時代を除き、月刊を基本とするいくつかの俳誌にほぼ毎号のように投句を続けていたので、俳誌が現存しているものについては、作品の発表時期を特定することが可能であることが気づかれた。

宮川(二〇一八)では、昭和初期から昭和三十年代までの俳句作品を分析し、それから推定構成したライフイベントを基に、その期間の個人史を作成した。昭和初期の俳句作品として、大正リベラリズムの中で登場した、ジャーナリスト出身の俳人加納野梅が主宰した俳誌『鬼栗毛』『新草』に投句を行ったという松本椿年自身の記載がある。松本椿年が、大正末期から昭和初期に投句をした最初の俳誌と考えられるが、いずれの俳誌も国立国会図書館、近代文学館、俳句文学館等のいずれの図書館にも所蔵されていないので、その確認ができない。それでも、『新草』の創刊号(昭和四年五月)から第四〇号(昭和七年八月号)までの掲載句から選句編集し、昭和七年(一九三二)に加納野梅が刊行した『新草俳句集』(国立国会図書館デジタルコレクションとして公開)に、松本椿年の作品が

三十四句掲載されている。

昭和四年（一九二九）四月に椿年の母校静岡県駿東郡小山町にあった小山町成美尋常高等小学校に、教育者であるとともに、渡辺水巴主宰の俳誌『曲水』の作家でもあった古見豆人（本名古見一夫）が校長として着任し、その推薦により、『曲水』への投句が始まった。椿年の『曲水』投句掲載は、第十四卷第十号（昭和四年七月号）から第二十卷第一号（昭和十年一月号）までであった。

古見豆人を中心に、幼なじみで富士紡績小山工場に勤めていた早間冬青子や坂本緑村らに、社外の俳人湯山素鷗や湯山逸素らを加えて、「あゆみ句会」が起こされた。古見豆人が昭和四年四月に静岡県駿東郡小山町で起こしたあゆみ吟社は、昭和六年一月には大富士吟社として発展し、月刊俳誌『大富士』の刊行となった。また、豆人が昭和十三年（一九三八）四月に東京世田谷に転居したことにより、中央の主要な俳誌の一つとなった。

俳誌『大富士』は、戦前発刊巻号第四卷第九号（昭和九年九月号）から最終刊第二十八卷第十一号（昭和三十三年十一月号）まで、静岡県立中央図書館が多くの巻号を所蔵しているが、第一巻第一号（昭和六年一月号）〜第四卷第八号（昭和九年八月号）、終戦前後の第十五卷第七号（昭和二十年七月号）〜第十八卷第十二号（昭和二十三年十二月号）までは欠号となっている。第十四卷第六号（昭和十九年六月号）から第十五卷第十二号（昭和二十年十二月号）までは、戦時中の出版統制により『三日月』『みどり』『微光』と合併統合され、『松籟』という誌名になったが、巻号の番号は『大富士』巻号数を継続踏襲している。また、一部欠号もあるものの、俳誌『大富士』については、戦前から戦後までのもっとも体系的に所蔵している唯一の図書館となっている。

もう一つの所蔵館は、国立国会図書館である。国立国会図書館の所蔵は、終戦の年昭和二十年三月と四月に刊行された『松籟』第十五卷第三号・第四号、再び元の誌名に戻された第十六卷第一号（昭和二十一年一月号）以降の刊行号である。第十九卷第九号（昭和二十四年九月号）までのものは、国立国会図書館の憲政資料室プラランゲ文庫のマイクロフィルム資料として、保管されている。プラランゲ文庫は、GHQの参謀第一部の戦史室長を務めていたG. W. Prangeが、一九四五年〜一九四九年まで検閲目的で集められた資料を、アメリカのメリーランド大学図書館に移送した資料群で、そのマイクロフィルムが、憲政資料室のプラランゲ文庫として公開されているので、検閲文書や検閲により黒く塗りつぶされた箇所がある検閲ゲラがそのまま保管される貴重な資料である¹⁾。ただし、このGHQの検閲期間、松本椿年が『松籟』戦後復興の『大富士』に投句した痕跡は見出ししていないが、プラランゲ文庫の昭和二十一年四月から昭和二十三年四月までの『大富士』第十六卷第一号〜第十八卷第四号について、再度の精査が必要であろう。戦後発刊号第十八卷第五号（昭和二十三年五月号）からは、国立国会図書館の通常の出版物として所蔵されている。国立国会図書館所蔵分は、ごく最近までリール式のマイクロフィッシュの閲覧になっていたが、現在はデジタル資料として閲覧可能になっている。

この『大富士』への椿年の投句は、第二次世界大戦が始まり戦禍が拡大していく昭和十六年（一九四一）四月号を最後に中断され、昭和二十二年（一九四七）一月頃一時再投句の痕跡があった。国立国会図書館プラランゲ文庫のマイクロフィルムとして所蔵、閲覧可能なGHQ占領下の『大富士』第十六卷第一号（昭和二十一年一月号）から第十八卷第四号（昭和二十三年四月号）を閲覧したとこ

る、第十七巻第四号（昭和二十二年四月号）古見豆人選の「大富士句帖」に、椿年の作品が四句掲載されているのを見出し出した。

肥料背負ふ角帽に風光けり
（四頁）

下駄の緒の三日となりしゆるみかな

うらゝかや米庫に積む疎開の荷
（九頁）

放ちたる鶏帰り来ずお元日

『大富士』第十七巻第四号（昭和二十二年四月号）大富士句帖 古見豆人選）

この時代、四月号への投句締め切りは二月一日となっていたので、投句再開は昭和二十二年一月中であろう。また、第一句第三句は、戦時疎開で小山町中島あるいは椿年の生家に疎開していた、大学生あるいは荷物から春の長閑さを吟じた句であるので、昭和二十二年または二十一年の春の作品であろう。椿年の大富士への戦後復帰の最初の投句作品であることを考えると、単なる春の長閑さではなく、戦争が終わり平和が戻った春の長閑さを吟じた句とすると、昭和二十一年三月〜四月頃の作品を投句したと推定するのが自然であろう。第二句第四句は正月の句であるので、これは昭和二十二年一月の新作ではないだろうか。

それは、前年の昭和二十二年七月に、『大富士』通巻二百号の記念と、『大富士』の戦後復興を目指して、その誕生の地で開かれた小山町で『大富士』通巻二百号の記念大会が一つのきっかけだったのではないかと推定は容易である。その大富士二百号記念大会のことは、『大富士』第十七巻第九号（昭和二十二年九月号）には、小山町在住の小野虹人の「二百号記念大会記」という記事があ

り、その中にこの大会における椿年に関する記載が残されている。

二百号記念大会記 小野虹人

吾等の「大富士」も、来る八月號に達するので、この喜びを祈念するため、七月十三日を期し、發祥の小山に於て、全國大會を開催する事になつた。その日は早朝小雨が降りかけて、氣づかされた天候も八時ごろからそろそろい晴れ上がり薄日がさして大會日和となつた會場は豊門會館階上である。薫風が飄々と吹きぬける。閑江佛子兩君始め、地元の諸君は、中學校から裁縫臺を運ぶ。黒板をかついで来る。全員大わらはである。

（中略）

午後一時、薫風の選句を取纏めて、椿年君番號を讀みあげ、沐人君その句を朗讀、両君とも創刊以來の同人である。その中に席題句のプリントが出来たので、その互選に移り、選句を取纏めたところで、豆人師が起つて、「生々流動」と題し佛道の精進を説き、大富士これまでの推移と、將來の進展につき一時間に亘つて熱辨をふるわれた。

『大富士』第十七巻第九号 昭和二十二年九月号 一二〜一三頁）

（中略）

また、この記事の末尾に、「五點以上の高點句」という小見出しで、この記念大会で行われた句会の諸家の作品が記載されていた。その中で、選句されていた椿年の句が二句掲載されていた。

迎火や静かに昏るゝ湖の色

子に門火焚かせてそこら草を取る

〔大富士〕第十七卷第九号 昭和二十二年九月号 一三頁

昭和二十二年一月の投句から『大富士』に復帰した椿年であったが、その投句も昭和二十四年七月の作品投句（『大富士』第十九卷第十号 昭和二十四年十月号）をもって暫く休止された。

暮の波木槿花瓣合わせあふ

（五頁）

迎火や稻の葉先に出でし虫

（一三頁）

〔大富士〕第十九卷第十号 昭和二十四年十月号 大富士句帖 古見豆人選

次に、再び復帰したのは昭和二十八年（一九五三）七月からであったという主旨を以前の稿では記したが、見落としていた投句が前年の三月号にあった。その前年昭和二十七年三月号の『大富士』第二十二卷第三号「大裾野」古見豆人選五頁に、椿年の句が二句掲載されているのをごく最近見つけた。『大富士』第二十四卷第四号（昭和二十四年四月号）から第二十八卷第十一号（昭和三十三年十一月号）までの比較的まとまった戦後刊行分が、日本の古本屋のネットワークで売りに出ているのを見つけ、急ぎ入手したその成果である。椿年年譜に追加修正が必要である。

除夜の鐘時計を捲いて座に戻る

日は午なり御慶着のまゝ牛に餌を

〔大富士〕第二十二卷第三号 昭和二十七年三月号 大裾野 古見豆人選 五頁

この二句は、椿年の『句集 老稚』にも再掲載されている。第二句はいかにも椿年らしい正月の秀句である。同様に、『大富士』第二十二卷第八号（昭和二十七年八月号）に、親交のあった前田岳人による「足柄吟行」という記事があり、その記事も追記して補足する。その記事の冒頭に椿年のことも記載されている。

四月十九日句會尻で明日の吟行参加を募り虹人、沐人、椿年、浄雨子、月峰、の賛意を得た。虹人沐人両氏は岳人居に泊った。師と虹人は前夜の疲れをもともせず起き出して朝食を共にし九時集合の役場前に急いだ。途中椿年氏が現れ今日は親類が結婚式準備に来て呉れとの事で断りに熊々敷町の道を追いかけて来られた。是れもやむを得ない。（前田、一九五二、二四頁）

古見豆人師が若葉の頃、思いがけず（小山の）句会に来訪した事を吟じた作句時期が特定できにくい作品が『大富士』第二十四卷第十一号（昭和二十九年十一月号）に掲載されている。この昭和二十七年四月十九日に小山町で開催された句会の椿年の句と考えるのは、自然な推定ではないだろうか。

来ぬときめし師が来て句座の風薫る

〔大富士〕第二十四卷第十一号 昭和二十九年十一月号 大裾野 古見豆人選 一二頁

この句が掲載された昭和二十九年五月二十三日には、足柄峠に建立された「春風は幼けなき日の句ひかや」の句を刻んだ豆人句碑の除幕式と記念句会が、足柄峠で催されている。そのためこの椿年の

風薫るの句は、季節の一致から漠然とその折の句会を吟じた句と捉えやすいが、大富士俳句会挙げての記念句会に「来ぬときめし師が来て」つまり豆人師は来ないだろうと思っていたところ、おいでになつて句会が盛り上がったという趣の句会としては趣旨にそぐわない。ちなみに、『大富士』第二十四巻第七号（昭和二十九年七月号）は、この句碑除幕式と記念句会の特集記事を掲載している（同誌一頁〜五頁）。むしろ、その二年前の昭和二十七年四月十九日に豆人師が小山町に開かれた句会で椿年が吟じた句を後に『大富士』に投句したと考えるのが、椿年の作風から考えると自然であろう。

ちなみに、足柄峠の豆人句碑除幕式の記念句会には、多くの大富士縁故の俳人、選者・同人・誌友が列を連ねていたが、その記念句会で椿年が吟じ、古見豆人選の「矚目雑詠」の部で佳作となつたのは次の句であつた。

富士からの薫風句碑の座をめぐる

〔『大富士』第二十四巻第七号 昭和二十九年七月号 矚目

雑詠 古見豆人選 佳作 四頁〕

ところが、その翌年昭和三十年（一九五五）五月六日、椿年に妻すみとの永久の別れが訪れた。行年六十九歳で当時としては、十分天寿を全うしたといえるものであつたかもしれないが、特別な長寿者として残された椿年の人生はなお三十年余りあつた。

老妻没す 三句

うなづけど目はうつるなり南風に灯す

子の孫の泣くを制して南風に佇つ

師よりの悼句南風の線香つぎ足しぬ

〔『大富士』第二十五巻第七号 昭和三十年七月号〕

五月は妻すみの一周忌であるが、この頃『大富士』に投句された次の二句は、妻すみとの思い出の句であろう。松本椿年（傳次郎）がすみと婚姻したのは、明治四十一年から四十二年（一九〇八年〜一九〇九年）頃で、入籍は明治四十三年十月、翌十一月に長女イマが誕生しているので、いずれもこの頃の光景を吟じた句であろう。

辛夷咲くや畑尻にある鋤二丁

〔句集 老稚』七一頁〕

〔『大富士』第二十六巻第七号 昭和三十一年七月号 大裾

野 八頁〕

身重なる妻燕の巢見上げけり

〔『大富士』第二十六巻第八号 昭和三十一年八月号 大裾

野 六頁〕

第一句は、『句集 老稚』にも掲載されている微かな情感の漂ういかにも椿年らしい秀句である。第一句は年譜から見ると、すみと新居で生活を始めた明治四十一年から四十二年頃の新婚間もない頃、あるいは大正六年（一九一七）九月は分家をし、自分の田畑を持つことになるので、あるいは翌年の春頃の光景である可能性もある。いずれにせよ、妻すみの亡くなった翌年に投句をしているので、その頃浮かんだ亡き妻の思い出を、そのまま作句した新作と考えるか、若い時の原句があり、それを改作したものかは判断できない。ただ、鋤二丁という表現は、それで二人で畑を耕している二人があり、鋤を置いて、耕作の途中で休憩している若い二人の男女を

想像させるという熟練した表現技法からは、明治末から大正初期の二十代の椿年の作としては熟練し過ぎていと捉えるならば、やはり辛夷の花やあるいは実際に畑隅に置かれていた鋤から、若き日の二人の光景を思い出して吟じたと考えの方が、自然であろう。第二句はずっと素朴な表現なので、あるいは若き日の原句があり、それを少し手を加えたということも考えておかしくない程、写実的な描写で作句されているが、妻の亡くなった後、燕が巢を作っているのを見て、思い出した若き日の妻の姿の句とすると、なお深奥に悲しみを秘めた椿年の痛々しい心情の句と考えることもできるかもしれない。

この年の『大富士』十一月号に、お盆の迎え火の句がある。妻すみが亡くなった翌年の句と考えると、この句が伝える椿年の微妙な心情が秘められている。「草風」という語句は「爽風」と同義で使われることがあるということから、悲しみから少し立ち直ってきた椿年の心境を伝える句であろう。

一と筋の草風立てり門火焚く

『大富士』第二十六卷第十一号 昭和三十一年十一月号

大裾野 古見豆人選 八頁

この昭和初期から戦後に亘る椿年の投句活動の中心であった『大富士』も、昭和三十三年十一月二十二日、主宰古見豆人の急逝により、第二十八卷第十一号（昭和三十三年十一月号）をもって廃刊となった。椿年が俳誌の世界に復帰してから、わずか五年の歳月が流れたところであった。

その『大富士』は、古見豆人の門人の一人、小笠原龍人が、『大

富士』の後継誌として、俳誌『塔』を創刊し、塔俳句会を起こした（小笠原、一九七四）。その創刊間もない頃から、『塔』の同人となった。

俳誌『塔』は、椿年の遺品として松本家に残されている俳句誌に二号分が現存している。第十一卷第十一号（昭和四十四年十一月号）と、第二十五卷第九号（昭和四十七年九月号）の二号のみであり、その俳誌への椿年の投句状況は当初判然としなかった。

俳誌『塔』は、公益法人俳人協会が運営する俳句文学館に、初期の刊行巻号から、多くの巻号が収集所蔵されている。第一巻第十号（昭和三十四年十月号）の一号を除けば、比較的継続的に収集されているのは、第五巻第七号（昭和三十八年七月号）以降の巻号であるが、それでもかなりの欠巻欠号がある。『塔』の所蔵館として、埼玉県立熊谷図書館埼玉資料室が、多くの巻号を所蔵しているが、第十巻第一号（昭和四十三年一月号）以降のものに限定され、しかも同様に、多くの欠号がある。この二館の所蔵する巻号から、椿年の掲載句の資料を作成した。

日本の古本屋というネットワークで、欠号を探して見たところ、偶然創刊号を見つけ購入した。ただし、小笠原龍人が余程急いで創刊したためか、大富士同人の句は少なく、椿年や周辺の俳人の掲載句はなかった（宮川、二〇一七）。日本俳句文学館の欠号となつている第一巻第十一号（昭和三十四年十一月号）と第二巻第二号（昭和三十五年三月号）の継続した四号分が売りに出ているのを発見し購入した。このわずか四号分の欠号入手であるが、やはり年譜の上で重要な出来事が含まれていた。これら購入巻号で、松本椿年の年譜に関わる事項、あるいは椿年の掲載句については、宮川（二〇二〇）で詳細な分析報告を行った。

その第一卷第十一号（昭和三十四年十一月号）は『豆人先生一周忌追悼号』というタイトルが付けられているが、「特集 豆人先生の思い出」欄があり、九人の同人がエッセイを寄せている。

『塔』第一卷第十一号追悼号「水煙集 同人作品」（二〇頁）に寄せた椿年の句は、五句であった。第一句は、山芋（自然薯）掘りの名人で、その収穫を人に差し上げて喜ばせることが多かったと伝えられるいかにも椿年らしい句である。豆人が小山町に在住し、毎月のように開かれていた大富士句会で、椿年が山から採ってきた自然薯で作った薯蕷汁飯を振る舞ったことがあり、その折の亡き豆人師の思い出を句に残した作品であろう。

追憶

とろゝ飯亡き師の記録十二腕
亡き師への追憶うすれ糺祭忌

ステッキにより来し友や糺祭忌

子規の忌や小康を得て句座尻に

糸瓜忌や師の記憶新たにす

〔『塔』第一卷第十一号 昭和三十四年十一月号 水煙集

同人作品 二〇頁）

椿年の『塔』への投句は最晩年の昭和五十九年一月号第二十六卷第一号（通卷三〇〇号）まで続き、最も継続的な投句期間が長い俳誌であった。

『大富士』『塔』とともに、椿年が多くの作品を投句した俳誌は、原田濱人が主宰した『みづうみ』（みづうみ発行所）であった。

『みづうみ』への投句は、原田濱人の門人でもあった湯山素鷗や

湯山逸素らの奨めによるものと考えられるが、椿年の『みづうみ』への作品掲載は、第二五六号（昭和三十六年五月号）からであり、昭和五十八年十一月の第五二六号の竿頭欄四句（四頁）で終結している。『塔』と並び、最晩年までのかかなり長い期間にわたって投句された俳誌となった。

この俳誌ばかりは、昭和三十六年五月号（第二五六号）から昭和五十八年十一月号（第五二六号）までかなりの巻号が遺品として保存されている。この遺品も多くの欠号があり、それらの欠号について俳句文学館所蔵の閲覧調査を行った。その『みづうみ』についても、昭和五十八年十一月号までの閲覧収集作業を行った。ただし、日本俳句文学館所蔵の『みづうみ』は、第五〇八号（昭和五十七年五月号）〜第五七三号（昭和六十二年十月号）まで欠号となっており、椿年の『みづうみ』掲載句は、遺品として残されていた第五二六号（昭和五十八年十一月号 竿頭欄 四頁）の掲載句を最後として以後確認ができない。

昭和三十年代は、昭和三十年（一九五五年）五月の妻すみとの死別から始まり、昭和三十三年（一九五八年）十一月の俳句の師古見豆人の急逝、昭和三十九年一月孫娘京子の婚姻、三月の俳人湯山素鷗の死、七月の椿年の喜寿の祝と慶弔様々な出来事で終わっている。

昭和四十年代の椿年年譜に記載した出来事と作品は、宮川（二〇一九）でまとめている。昭和四十年三月の湯山素鷗の一周期追善句会、同年九月嗣子辰雄の病死という更に痛ましい出来事で始まった。

素鷗忌の句碑にゆらゆら花の影

花冷や句碑にたつぷり手向け酒 (『句集 老稚』三一頁)

〔『みづうみ』第三一〇号 昭和四十年十一月号 みづうみ
俳句 瀧人選 八頁〕

昭和四年(一九二九)四月に古見豆人師が椿年の母校駿東郡小山町立成美尋常高等小学校長として着任し、直後に起こしたあゆみ吟社(句会)以来の俳句仲間で、館屋という屋号のお菓子屋さんのご主人で、その二階で毎月句会が開かれていたことがあった、長い付き合いの湯山素鷗の一周忌の句である。また、次の句は、嗣子辰雄との死別の句である。

嗣子淋巴腺肉腫にて逝く

秋冷の耳寄せ聴くや吾子の声 (『句集 老稚』二二二頁)

慟哭を耐へ寄る白壁の冷 (『句集 老稚』二二三頁)

コスモスを押しやりて張る葬幕 (『句集 老稚』二〇四頁)

鶏頭やうつろ心に一ト七日

線香の煙露けく地を這える (『句集 老稚』一六七頁)

〔『みづうみ』第三二二号 昭和四十一年一月号 みづうみ
俳句 瀧人選 七頁・九頁〕

その五年後の昭和四十五年(一九七〇)『句集 老稚』の刊行。この句集には、明治三十一年(一八九八)十歳頃から昭和四十四年(一九六九)頃までの大凡七十年間に亘る七百四十八句が掲載されている。その『句集 老稚』秋の部末尾の十五句である。

嗣子国立千葉病院に逝く 十五句

秋冷えのベツト絶望の軒なる

身に入むや父たる吾も莫たるか

秋冷や途切れ途切れとなりし脈

秋冷えや耳よせ聞くも語にならず

身に入むや血脈ここに絶えんとす

泣くまじと寄る壁白し昼の虫

慟哭を耐へ廊下の冷えに出し

千葉の空暮秋の色に低き哉

屋上の一草露も乾き居り

安置室屋の灯白く冷ややかに

秋の風名なき位牌に香を焚く

露の世の定めか老を残し逝く

先逝くも後逝くも皆露けしや

大野分去りたる如し家の中

子は遠く虚空に秋の日は沈む

(『句集 老稚』二一一〜二一六頁)

昭和四十七年(一九七二)夏から秋にかけて、様々な出来事が起きた。七月十二日には小山町大水害と呼ばれる近くの農業用貯水池の中島ダムが大雨で決壊し、丹精を込めて世話をしていた田畑が大きな被害を受けた。農夫としての椿年のその落胆ぶりは、次の三句からも伺える。

水見舞鼻つまらせて語られし

〔『塔』第十五卷第四号 昭和四十八年四月号 塔俳句 小

笠原龍人選 八頁〕

田も畑も川原となりて虫すだく
決瀆のダム底幽し尽の虫

『塔』第十五卷第四号 昭和四十八年四月号 水煙集 同人作品 三四頁)

その翌月八月四日には、俳誌『みづうみ』の主宰原田瀆人が没する。葬儀は瀆人の住んでいた浜松で行われたが、前月の水害の後片付けが終わっていたかも知れない折であり、その葬儀に参列できただかどうかは不明であるが、その頃の作句と考えられる句が『みづうみ』第三九五号 昭和四十七年十二月号「蛍雪欄（十二月号）」に掲載されている。二人の選者佐野瓢雨と、原田瀆人の子息原田喬が同時に選んでいる句である。あるいは、瀆人師の葬儀の折の寺の境内の景色を吟じた句である可能性がある句ではないだろうか。法師蟬はつくつくぼうしのことであるが、頭に僧侶の意をもつ法師を冠した蟬であり、また参道とある。

参道の洩日地にしむ法師蟬
『みづうみ』第三九五号 昭和四十七年十二月号 蛍雪欄
(十二月号) 佐野瓢雨選 三四頁 原田喬選 三五頁)

また、不幸なことや用事ばかりではなく、その月五人目の曾孫が生まれている。内孫である奈美江の次男の誕生であった。

昭和四十年代の終わりは、昭和四十八年（一九七三）三月の同年齢の俳句仲間前田岳人が天寿を全うした。椿年、岳人とも八十五歳となっていた。椿年の悲嘆ぶりは次の『みづうみ』掲載の五句から

推測されるものであった。また、これら五句は、椿年九十四歳となった、最晩年の昭和五十七年（一九八二）四月に刊行した『第二句集 限界』春の部の末尾「岳人逝く五句」（七九〜八〇頁）に一部字句に手を加えて、掲載している。

道穴の囲い臈に通夜帰
吾にも言ひたげ遺影冴返り
次に逝くは吾かや春の雲仰ぐ
春時雨来そうな風や花輪ゆる
花冷の土かけ永遠の別れかな
『みづうみ』第四〇二号 昭和四十八年七月号 竿頭欄
(一) 二六〜二七頁

昭和四十九年三月、椿年米寿の祝。満八十六歳となり、孫や曾孫に囲まれ、平穏な最晩年を象徴する出来事となった。

子孫曾孫うらかに顔を揃えけり
『塔』第十六卷第八号 昭和四十九年八月号 塔俳句 小笠原龍人選 八頁)

また、その年の十二月には、みづうみ小山支部による松本椿年翁米寿祝賀句会が藤曲公民館（十二月一日）で開催された（岩田、一九七二）。その句会で吟じた句。

霜濃ゆく降りしゆふへの焚火跡
『みづうみ』第四二二号 昭和五十年二月号 小山支部

「松本椿年翁米寿祝賀句会の記」 三二頁

穏やかな昭和四十年代の終わりと、椿年の超高齢期の訪れであった。

昭和五十年代前半昭和五十六年頃までの主な出来事と作品は、前稿（宮川、二〇二一）で記載した。超高齢期となった椿年の最晩年には、比較的平穏な日々が訪れていた。

荒波をぬけし米寿の初日の出

『みづうみ』第四二〇号 昭和五十年一月号 頌春 名刺
交換 四〇頁

冬耕や苦悩の眉を空に向け

『塔』第十七卷第三号 昭和五十年三月号 水煙集 同人
作品 二八頁

昭和五十年初頭の句である。『みづうみ』一月号には「名刺交換」という欄があり、同誌の同人・誌友が年賀状のように念頭の挨拶を一句で述べるものであった。前年に米寿の祝いを済ませ、この年満八十八歳になる椿年の年頭の句である。荒波を抜けてきたのは、日の出というより、椿年の人生そのものである。第二句冬耕の句は、さすがに高齢で冬季の農作業がきつくなっているという自らの老いの姿を吟じている。

この年の九月、『みづうみ』を起こした原田瀧人の長男で、シベリア抑留と昭和の恋多き俳人として知られる原田喬が俳誌『榧』を創刊、誘いを受けて同人参加。この『榧』が、最晩年の最後まで投

句を続けた俳誌となった。その創刊号に掲載された三句。第一句植うる田の句は、いかにも椿年らしい句である。田植えをする田の一角それぞれに富士山の雲が映っているという句。第二句は恐ろしい電が降った後のほつとした小さなスポットを吟じた句である。栗の花の咲く初夏に亡くなった高齢者の葬儀は、高齢者ばかりという光景をそのまま素直に作品としたものである。

植うる田の一角富士の雲落とす

電蒼く解けつつ草の根に溜る

会葬者老人多し栗の花

『榧』第一号 創刊号 昭和五十年九月 榧集 原田喬選
二二頁

昭和五十年の秋耕の句であるが、加齢で疲れやすくなっているが、それでもまだ農夫として現役である。

鯛雲鯨突立てて背を伸ばす

『塔』第十八卷第一号 昭和五十一年一月号 塔俳句 小
笠原龍人選 一八頁

いみじくも知事杯賜う天高し

『塔』第十八卷第二号 昭和五十一年二月号 塔俳句 小
笠原龍人選 一一頁

また、この年の十一月には静岡県知事杯を受けた。これが、特別な高齢者ということか、文化功労といった表彰かは不明であるが、

椿年にとってはまさに格別嬉しいことであつたことだろう。

昭和五十一年満八十九歳となる年である。

九十才しかと踏み立つ初日影

〔『みづうみ』第四三三三号 昭和五十一年二月号 竿頭欄
四頁）

初鶏や嫁の挨拶はほがらかに
嫁一人ふえてぬくとし雑煮の座

〔『塔』第十八卷第三号 昭和五十一年三月号 塔俳句 水
煙集 同人作品 二六頁）

内孫典彦が前年結婚し、家族に孫の嫁を加えた正月であつた。
また、こんな句も、『塔』に掲載されている。まだまだ、壮健な
高齢者である。

麦飯に育ちこの齢まで生きし

〔『塔』第十八卷第十号 昭和五十一年十月号 塔俳句 小
笠原龍人選 九頁）

昭和五十二年椿年が、満九十歳となる年であつた。まだまだ、農
夫としては現役である。また、前年末に生まれた内曾孫のお食い初
めや初節句、卒寿の祝といった長寿者ならではの慶事も続してい
る。俳句仲間と小山町と中川温泉や葦山といった場所への近距離の
小旅行をするなど、まだまだ壮健であつた。

元日や客来ぬ畑をひとまわり
確りと楔を締めて鋤始め

凍て土の腕にこたえし鋤始め
〔『みづうみ』第四四七号 昭和五十二年四月号 竿頭欄
六頁）

春の月兎に喰ひそめの茶碗買ふ

〔『塔』第十九卷第九号 昭和五十二年九月号 塔俳句 小
笠原龍人選 一二頁）

よちよちと庭に出し兎や鯉幟
〔『塔』第十九卷第八号 昭和五十二年八月号 水煙集 同
人作品 三六頁）

卒寿兒五月の風に吹かれ立つ
〔『みづうみ』第四五一号 昭和五十二年八月号 竿頭欄
四頁）

温泉窓開ければ聞こゆ河鹿の音（中川温泉）

〔『塔』第十九卷第十号 昭和五十二年十月号 水煙集 同
人作品 四七頁）

中川温泉は神奈川県上尾郡山北町にある温泉で、おそらく俳句
仲間との小旅行であろう。また、秋には、稲が猪に荒らされる。ま
た誰か亡くなられた。

鎌を手に猪害の稲に立ちつくす

は、まだまだ衰えを見せないものであることを示している。

コスモスへ倒れかかりし葬り旗
渡鳥葬り花輪に影落とす
一柱の香に秋ゆく七七忌

碌々と九十二の春迎へたり 椿年

〔『塔』第二十卷第三号 昭和五十三年三月号 塔俳句 小笠原龍人選 一一頁〕

〔『みづうみ』第四六八号 昭和五十四年一月号 頌春 四頁〕

昭和五十三年は満九十一歳となる年である。この年の十月には、『塔創刊二十周年合同句集（第三集）玲泉』が刊行され、椿年の作品も四十句掲載され、その半分の二十一句は『第二句集 限界』に再集録されている。また、山梨旅行もしている。至って壮健である。

打ち返す土黒々と夕畑

〔『みづうみ』第四七三号 昭和五十四年六月号 支部句会報 みづうみ小山支部句会四月例会 沐人報 四月十四日 於菅原千代女居 三九頁〕
〔『みづうみ』第四七五号 昭和五十四年八月号 竿頭欄 五頁〕

葡萄熟れて勝沼の空日々に澄む
葡萄棚洩るる日筋のむらさきに

凧や三日月ふわと飛びそうな

〔第二句集 限界』一七六頁〕
〔『みづうみ』第四六八号 昭和五十四年一月号〕

〔『句集 限界』一九三頁〕
〔『みづうみ』支部句会報 みづうみ小山支部句会十二月例会 沐人報 十二月八日 於菅原千代女居 三六頁〕

昭和五十四年は満九十二歳となる年である。『みづうみ』一月号年頭の句である。碌々との句は、この年九十二歳となるが、もう世の中のお役に立たなくなりました、というような趣の句意である。それでも、みづうみ小山支部四月の例会で吟じた句は、農夫としてまだまだ現役であることを示す、余人には作りがたい秀句となっている。また、その句は、『みづうみ』第四七五号の巻頭欄に掲載された句であり、農夫としてだけでなく俳人としては、なお円熟した瑞々しい感覚が維持されていることを示す。また、小山支部十二月例会で吟じられた凧の句も、俳人としての句作の力と感覚

昭和五十五年、満九十三歳となる年である。『みづうみ』第四八四号、同年四月号の正月の二句だが、初詣の句は、願いごとえば、苦しまずに死ぬることだといった素朴な老境を表している。さすがにその時となると、正月の句会でも特別な長寿を祝福される年となったということ淡淡々と吟じている。また、この年の五月には『みづうみ』第四八四号で、「松本椿年翁句集より」という欄が設けられ、『句集 老稚』の夏から秋の十六句が紹介されている（同号 三九頁）。

苦しみのなき死を願ひ初詣
長寿を祝福されし初句会

（『第二句集 限界』七頁）
（『第二句集 限界』一七頁）
『みづうみ』第四八三号 昭和五十五年四月号 竿頭欄
五頁）

ちろろ老ゆ声かも眼鏡外し見る

（『みづうみ』第四九〇号 昭和五十五年十一月号 支部句
会報 みづうみ小山支部 十月例会詠草 十月八日 於菅
原千代女居 三六頁）
（『みづうみ』第四九二号 昭和五十六年一月号 竿頭欄
四頁 句評 葉蘭 二六頁）

ちちろ（蟋蟀）老ゆとあるが、老いてきたのは椿年自身自身とい
うことだろう。また、この年の晩秋、また、古くからの俳句の仲間
が亡くなった。翌年の六月に追善句会を行った故人岩田柴人か小野
虹人のいずれかであろう。

忌の僧のおでまし遅し末枯野
（『塔』第二十三卷第五号 昭和五十六年五月号 塔俳句 小
笠原龍人選 八頁）
（『限界』一五〇頁）

昭和五十六年、満九十四歳となる年である。この年の六月十日、
『みづうみ』小山支部の俳人岩田柴人・小野虹人の追悼句会が開か
れた。これは、昭和四十九年に埼玉県の和光市に転居していた石田
仏子の強い働きかけによったものだったという。しかし、この年の
九月、『大富士』からの気の合った俳句仲間であった、その石田仏

子が亡くなった。その年の十一月、駿河小山駅近くにある乗光寺
で、石田仏子の四十九日法要と追善句会が行われた。また、その日
に乗光寺墓地に遺骨が葬られた。

勝福寺にて岩田柴人・小野虹人の追悼句会（六月十日）
追悼の句もなく梅雨の忌に侍る

（『みづうみ』第四九九号 昭和五十六年八月号 『限界』
一二九頁）
墓と言うも草に露けき石ひとつ
（『みづうみ』第五〇四号 昭和五十七年一月号）

右の句は、前稿（宮川、二〇二二）で、『みづうみ』への投句の
時期から石田仏子のへ追悼句ではないかと推定した一句である。
次の句は、その昭和五十六年大晦日の句と考えられる句である。

行く年の一と日一と日が重くなる
（『椎』第八〇号 昭和五十七年四月号 青北風集 九頁）

昭和五十七年四月『第二句集 限界』の作品

翌昭和五十七年四月、椿年は生家（本家）を継いでいた松本栄・
喜美子（椿年の六女）夫妻による編集作業の支援もあって『第二句
集 限界』を出版した。九十四歳での出版であった。この句集に掲

表一 『第二句集 限界』の選句の基になった掲載俳誌の句数の分類

掲載誌 / 季節の部	正月	春	夏	秋	冬	合計
みづうみ	30	80	81	82	42	315
椎	2	0	0	2	1	5
塔	14	63 (62)	47	40	27	191 (190)
塔二十周年合同句集 玲泉	1	1	1	0	0	3
不明	10	33	18	24	16	101
合計	57	177 (176)	147	148	86	615 (614)

注) () 内の数値は、春の部に部に含まれていた誤編集の一句を除いた場合の合計句数

載されている句は、昭和四十五年四月に刊行した『句集 老稚』以降十二年の間に作句あるいは発表されたおびただしい作品の中から、選句されたものと考えられる。試みに、椿年が投句したと考えられる俳誌等から、独自に椿年の作品を収集して作成した椿年作品のデータベースから、この『第二句集 限界』の掲載句の出現を分析してみた。表一に、その出典別の句数を示す。

椿年のその時期の主な投句俳誌『みづうみ』と『塔』、『椎』は、椿年の遺品あるいは公的な図書館俳句文学館、埼玉県立熊谷図書館に所蔵されていた俳誌を閲覧し確認できる椿年の作品を収集した。『みづうみ』と『塔』はほぼ同じ時期に投句された俳誌であるため、それぞれの欠号分は互いに補充し合うことが可能であったので、ある程度の収集確認が可能となった。それでもなお補えない時期も若干あったことは、否めない。また、同郷の俳人湯山逸素

が、昭和三十一年に創立した細道俳句会とその同人誌『細道』という俳誌があり、その同人であったことは知っているものの、おそらく小山町周辺の規模の小さな俳誌であったためか、いずれの図書館でも所蔵されていないようであり、所在が全く確認ができていない。

『第二句集 限界』は、椿年の作品六百十四句が選句掲載された句集である。『みづうみ』と『塔』が、この時期の主要な俳誌である。これらの俳誌に掲載された椿年の作品を、掲載誌から分類してみた。『みづうみ』と『塔』の掲載作品は、いわゆる使い回しが少なくない俳句の世界ということからか、ほぼ同一句と思われる作品も少なくない上に同一誌でもあとでまとめ直しての再掲載といったことも少なくなかった。この分析では、掲載刊行の時期がもっとも早いものを、この句集の主な出典として分類した。

『第二句集 限界』掲載の六百十四句正月の部五十七句、春の部百七十七句(秋の部との重複一句を除くと百七十六句)、夏の部百四十七句、秋の部百四十八句、冬の部八十六句、全六百十五句の句集である。『みづうみ』は三百十五句、『塔』百九十一句、『椎』五句、『塔二十周年記念句集 玲泉』三句、不明百一句に分類でき。夥しい掲載句が残っている『みづうみ』『塔』の掲載句からは、不明百一句というのは、不思議に多い数値であろう。勿論、俳誌への未発表作品をここでまとめて世に残したということもあるが、もう一つ考えられるのは『みづうみ』『塔』『椎』いずれも欠巻欠号が少なからずあり、また完全に幻の俳誌となっている湯山逸素主宰の『細道』まで考慮すると、出典不明とした句の中に、それらの欠巻欠号に掲載された句が一定比率含まれている可能性も否定できないだろう。

この作業の過程で、一句季節の分類で不思議な重複のある燕の句があることを見つけた。

ゆく燕沖波煙る中に消ゆ （春の部 四二頁 第三句）

ゆく燕沖波けむる中に消ゆ （秋の部 一六七頁 第二句）

秋風の小滝吹き分く音さやか

〔第二句集 限界〕掲載 一四二頁

初幕庭木の影が伸びて来し

〔第二句集 限界〕掲載 一七三頁

新雪の富士をしりへに燕ゆく

ゆく燕沖波けむる中に消ゆ

〔第二句集 限界〕一六七頁または四二頁

〔塔〕第十六卷第三号 昭和四十九年三月号 塔俳句 小

笠原龍人選 八頁

「燕」は春の季語であるが、「ゆく燕」は季語「燕帰る」の同義語という大変紛らわしい事情がある関係で、編集時に混入したのである。ただ、この句は出典となった『塔』第十六卷第三号の小笠原龍人選の塔俳句八頁に並んでいる他の三句は、二句が秋の句と一句が冬の句であることから、秋の句として分類し、春の部からは除いて考えておいた方がよいだろう。従って、春の部は百七十六句、春の部の『塔』掲載句六十三句を六十二句、句集の合計句数は合計六百十三句ということになる。また、春の部の末尾に、昭和四十八年三月に亡くなった同年齢で『大富士』からの俳人前田岳人の追悼句五句が掲載されていることは、昭和四十八年の出来事のところで

で、再度記述した通りである。この配置は、昭和四十五年四月に刊行した椿年の『句集 老稚』の秋の部の末尾に、「嗣子国立千葉病院に逝く 十五句」を配置したのを意識しての配置であろう。いずれも、悲しい死別の句であるが、豊かな余情をもった秀句で季節の部を終結させている。

子は遠く虚空に秋の日は沈む 〔句集 老稚〕二一六頁

花冷の土かけ永遠の別れかな 〔第二句集 限界〕八〇頁

昭和五十七年四月『第二句集 限界』出版以降の作品と出来事

まずは、『第二句集 限界』ができあがった時の椿年の新刊の句とその頃の風薫るの句から、始めよう。

新刊の句集うららにページ繰る

〔塔〕第二十四卷第八号 昭和五十七年八月号 塔俳句

小笠原龍人選 一二頁

血も肉も潤れて生き居り風薫る

〔椎〕第八六号 昭和五十七年十月号 青北風集 一一頁

前年昭和五十六年九月に、二十歳年下の石田仏子が亡くなり、昭和五十七年八月、この年の九月に行われた仏子一周忌追善供養のために、仏子句集『花筏』没後出版。編集は俳誌『曲水』の選者小畑

耕一路だった。その句集の巻末「まぶたとじれば」に縁故の俳人諸家が思い出を寄稿しているが、椿年はその冒頭の寄稿者に置かれ、その末尾に次の句を留めている（『仏子句集 花筏』二一〇〜二二一頁）。

枯れて尚菊は香りを残しをり
椿年

また、この年の九月に四歳年下の俳人湯山逸素が行年九十二歳で亡くなっている。次の句は、その逸素への葬儀の追悼句である可能性が高いが、その土地の風習では火葬が一般的になってからも、葬儀のその日に埋骨ないし納骨をしまつ場合が少なくないので、「忌の塔婆」とあるのは、埋骨時に墓標の代わりに立てる埋骨卒塔婆ないし角塔婆であるのか。時期的に重なる前年の九月に亡くなった石田仏子の一周忌の小祥忌供養塔を表しているのか定かではないだろう（宮川、二〇二一）。

忌の塔婆枝に坂道つゆけしや

〔塔〕第二十五卷第二号 昭和五十八年二月号 塔俳句

小笠原龍人選 一九頁

冬ざれの公園杖をついて立つ

〔塔〕第二十五卷第三号 昭和五十八年三月号 塔俳句

小笠原龍人選 一六頁

昭和五十七年十一月頃、初冬の散歩の風景であろう。公園とは、椿年の住居近くにある金時公園であろう。この公園は、坂田金時の

生家、金時屋敷跡との伝承があった地に造られた公園で、その一角に金時神社があり、そこには昭和四十一年に大富士以来の俳句仲間十四人と建てた大富士献詠句碑がある。また、その金時神社の社殿の造営には、昭和四年四月に小山町成美尋常高等小学校長として赴任してきた古見豆人（本名古見一夫）による地域への働きかけが大きかったといわれる。ちなみに、その校長在職中の昭和六年八月に、古見校長は『坂田金時の研究』（古見、一九三二）という坂田金時研究の書籍を出版しているが、その豆人師や大富士仲間の思い出が深い場所での散歩の一風景であろう。なお、「杖をついて立つ」とあるので、この頃は足腰が弱ってきて、杖を持ち歩くのが常となってきたのであろう。

昭和五十八年は、俳誌への投句活動の大きな転換となる年であった。確認できる『みづうみ』への一番最後の掲載句は次の四句である。

刈り進む草に秋立つ句ひあり

木々すけて落ち込む滝の白さかな

夏蝶の滝の飛沫に紛れ去る

麦の塵焼く火夜更けを明滅す

〔みづうみ〕第五二六号 昭和五十八年十一月号 竿頭欄
四頁

これらの句は、草刈りの句であるが、九十五〜九十六歳頃の新作ではないかと推定される。刈り取った草の匂いに秋の兆しを感じ取ったという、かなり鮮烈な印象の句で、新鮮な観察眼が尚失われ

ていない超高齢期の椿年の感性を表す句である。第二句第三句も観察眼の鋭さは少しも失われていない。第四句の季語「麦の塵」は、それ以前の『みづうみ』掲載句では、

麦の塵焼く煙梅雨の雲と化す

〔『みづうみ』第三九一号 昭和四十七年八月号 課題句

入梅 酒井金風撰 四二頁）

が確認できるのみである。

『塔』第二十二卷第八号（昭和五十五年八月号）には、さらに表現が類似した次の句が掲載されている。あるいはこの句の使い回しという可能性もありえるが、麦焼きは麦刈りの後行われた（梅雨の頃）の農村の風物詩であったものであり、それにしても九十三歳頃の作品である。いづれにせよかなり高齢になってからの農作業に従事していたことから来る独特の作句である。

麦の塵焼く火狭霧に明滅す

〔『塔』第二十二卷第八号 昭和五十五年八月号 塔俳句

小笠原龍人選 一五頁）

『みづうみ』第五二六号（昭和五十八年十一月号）には、次のような記事がある。

昭和五十八年十月一日〜二日『みづうみ』の岳麓秋の句会が地元
の小山町桑木にある民宿山久荘を会場として開催された。これは、
岩田沐人（一九七九）が残した「岳麓秋の句会記」によって、その
全貌を知ることができる。第一日は、足柄峠回吟、九十六歳になっ

ている椿年はさすがに不参加であったが、第二日の句会に選者として参加。選者は大橋葉蘭、松本椿年、勝又桔梗子、梶本秋桑の四名であった。これが俳誌『みづうみ』で確認できる松本椿年に関する一番最後の記録である。

『みづうみ』を長期に亘って体系的に所蔵している図書館は少なく、もつとも多くの所蔵をしているのは俳句文学館であるが、その所蔵にしても第五〇八号（昭和五十七年五月号）から第五七三号までは欠号となっており、この最終の投句確認ができた第五二六号は椿年の遺品として子孫が保管してきたものによっている。『みづうみ』とほぼ同時期に投句を継続してきた『塔』への投句も、この年が最後となっているので、『みづうみ』への投句は、第五二六号を最後とした可能性は高いのである。

『みづうみ』の創始者原田瀆人の長男で、『みづうみ』の選者でもあった原田喬が、椿年その頃の事情を察してか、自分が主宰となつて昭和五〇年九月に創刊した俳誌『椎』百号記念号（昭和五十八年十二月号）には「特集青北風集作家作品」の欄が設けられ、その特集の最初の頁（七一―九頁）に上段は選者の藤田黄雲、下段に松本椿年の句が十句掲載されている。この特集と椿年の作品は、宮川（二〇一六）で記載したが、再度引用する。

石匂う

すかんぼの実のさわさわと夏に入る

うすうすと巢どりしお蚕や明易し

水草も秋立つ白根流し合う

北風や石工が叩く石匂う

風花や研ぎましたるノミの先

風や三日月ふわと飛びそうな
秋涼し古竹新竹打ち合える

なだらかに流れ継ぐ河去年今年

泉より淑気を引いて雉子翔つ

初明り波の穂さを走りけり

(註) 作者は九十六歳です(編集部)

『樵』百号記念号 昭和五十八年十二月号 特集青北風集

作家作品 七九頁下段)

これら十句の内、第七句の秋涼しの句以外は、いずれも『第二句集 限界』に選句掲載している作品であり、『みづうみ』あるいは『塔』に昭和四十五年九月(椿年八十三歳)以降に掲載発表された晩年の作品ばかりを選句している。また、編集部が追記した(註)作者は九十六歳です(編集部)というのは、すでに九十六歳という特別な高齢者となっているにも関わらず、なお嬰鑠として句作に励んでいる椿年への敬意が払われたものであろう。

昭和三十四年から四半世紀に亘り投句継続していた俳誌『塔』への投句掲載は、昭和五十九年一月号第二十六卷第一号をもって終止している。不思議なことに最後の投句となつた気負いは皆無で、ごく自然体の日常的な作品ばかりで、老衰というより、なお衰えない最晩年の姿を彷彿とさせるものである。なお、翌二月号に「新春賀句」という特設欄に、椿年から送られた年賀状の一句が冒頭に掲載されている。この句が、『塔』への爽やかな惜別の句となつた。

吹き飛ばすばかりの風や青簾

信玄の案山子目をはる甲斐路かな

洗いさらし着て爽に歩を拾う

地普請の幣爽かに頭をかすめ

『塔』第二十六卷第一号 昭和五十九年一月号 小笠原龍

人選 一七〇一八頁)

柿一つ落ち残りいて年を越す 松本椿年

(九十七才)

『塔』第二十六卷第二号 昭和五十九年二月号 昭和五十九年新春賀句 (年賀状より) 四六頁 冒頭一句)

俳誌『樵』への投句終止(絶筆)は、昭和五十九年九月号の第一〇九号「青北風集」の五句が最後の投句掲載となつたものである。椿年満九十七歳という超高齢の俳人としての俳誌における終活であった。しかし、いずれも高齢者とは思えない、自然観察と新鮮な感覚に溢れた夏の五句であった。

夏めける空を編みをり朝の蜘蛛

薫風や名なき一瀑木々を打つ

この土地の清水はみんな富士よりす

仏法僧霧たちこめし月淡し

河鹿の音瀬鳴り圧えてころころと

『樵』第一〇九号 昭和五十九年九月号 青北風集 一二頁)

その後の作品であるが、その翌月十月に、外孫(四女みどりの次男)の結婚披露宴に贈つた一句。

いわし雲縫って舞い行く番い鳥

また、その翌十一月には、椿年の初曾孫（内孫京子長男）成人の祝があり、そこで曾孫に贈られた句が残されている。次の一句である。

祝吟

大木となるも一つの実からなる

その年の十二月九日、小山支部の俳句仲間であった岩沢露萩追善句会が、小山町菅沼甘露寺で行われた。句会の資料が、椿年の遺品に残されている。それは、百六十二句が作者名を伏せて用紙に万年筆で縦書きに書き連ねたもので、句会で盲選（作者名を伏せた句中から、選者が秀句を選ぶ）ためのものであっただろう。それが遺品として残っているということはその追善句会で、選者を務めたことを示すもので、それらの中には椿年の作品は含まれていないと考えられるが、その句会のまとめに手書きで『岩沢露萩追善句集』が作られ、亡き俳人に献じられ、その中には椿年の句も記されたのではないかと推定されるが、その句集は確認できない。

昭和六十年七月の七夕の日には、満九十八歳となる年であった。この年の俳句作品は確認できないために、俳句作品から出来事を推定する手がかりが乏しい年であるが、次第に身体が衰えが椿年自身や周辺の人にはつきりと感じ取られる様子となっていたことであろう。居間にほとんど座ったまま、一日を過ごすような日も多くなっていた。その年の押し迫った十二月二十八日に遠方に居住している孫の一人に女兒が生まれた。そのことを翌正月に伝えられてその場

で「十四人目の曾孫だ」、「もう十分生きた。世話をしている周りが気の毒だ」ということを椿年自身が語った。⁽²⁾ その頃体力気力は目に見えて衰えていったが、意識や認知能力はまだ高い水準を維持していたのではないかと推測できる。しかし、その一月中に急速に人生の終焉が近づいていった。

その年の二月八日静かに息を引き取った。その数日前、ほとんど昏睡状態といえる状態の時に小声で何か呟いているのを介護していた家族が気付いた。それが、文字通り絶吟の句として伝えられる次の句であった。

春風に乗って行かばや句の行脚

葬儀は、生家近くの臨濟宗円覚寺派の勝福寺で行われた。

道号戒名 椿山壽年居士 行年百歳

俳句の雅号椿年から文字を選んだ道号戒名であるが、生前俳句仲間の前田岳人と共に鎌倉円覚寺の居士林や菩提寺の勝福寺などで座禅の修行を積み、生前受戒を受けた道号戒名であったという。明治大正昭和という日本の激動期の中で、農耕と俳句に生きた一人の俳人の一生であった。

謝辞

本研究は、松本椿年翁のご子孫松本喜美子・山崎京子・井上奈美江・松本典彦・松本時男の各氏による貴重な資料の閲覧許可とご証言が他の稿と同様、研究の基盤データとなっている。同じく、国立国会図書館・

日本近代文学館・静岡県立中央図書館・俳句文学館・埼玉県立熊谷図書館・御殿場市立図書館の貴重な蔵書を利用していただいたことも記して感謝の意を表す。また、筆者の実兄宮川光司・早苗夫妻に、さまざま側面で支援協力をいただいたことも、末尾に記し感謝の意を表したい。

注

- (1) 国立国会図書館リサーチナビ プランゲ文庫 <https://navi.ndl.go.jp/kensei/entry/Prange.php>
- (2) 宮川(二〇一六)で記載したが、筆者は松本椿年の外孫の一人にあたり、いくつかの椿年の重要なライフイベントに居合わせているが、このエピソードは筆者の臨場記憶による。

引用文献

- 石田仏子 昭和五十七年(一九八二) 仏子句集 花筏 私家版
- 岩田沐人 昭和五十年(一九七二) 松本椿年翁米寿祝賀句会の記 『みづうみ』第四二二号(昭和五十年一月号)、三一〜三二頁
- 岩田沐人 昭和五十八年(一九七九) 岳麓秋の句会記 『みづうみ』第五二六号(昭和五十八年十一月号)、三七〜三八頁
- 藤田黄雲 昭和四十九年(一九七〇) 原田濱人―俳句とその生涯― 私家版
- 古見一夫(豆人) 昭和六年(一九三一) 坂田金時の研究 国民文学社
- 古見豆人選 佐野閑江編 昭和九年(一九三四) 大富士句帖 第一輯 啓仁館(昭和九年六月発行『大富士』第一巻第一号〜第三巻第十二号 昭和六年一月〜昭和八年十二月の掲載句から選句掲載)
- 古見豆人選 佐野閑江編 昭和十二年(一九三七) 大富士句帖 第二輯 大富士吟社(昭和十二年十一月発行『大富士』第四巻第一号〜

- 第六巻第十二号 昭和九年一月〜昭和十一年十二月の掲載句から選句掲載)
- 古見豆人 昭和十四年(一九三九) 富士に憑かれて 『大富士』第九巻第七号、四四〜四五頁
- 古見豆人選輯 昭和十五年(一九四〇) 大富士句帖 第三輯 大富士吟社(昭和十五年八月発行『大富士』第七巻第一号〜第九巻第十二号 昭和十二年一月〜昭和十四年十二月の掲載句から選句掲載)
- 古見豆人 昭和十七年(一九四二) 大富士風土記(續) 駿河小山支部 『大富士』第十二巻第二号(昭和十七年二月号)、四四〜四五頁
- 古見豆人選輯 昭和十九年(一九四四) 大富士句帖 第四輯 大富士吟社(昭和十九年十二月発行『大富士』第十巻第一号〜第十二巻第十二号 昭和十五年一月〜昭和十七年十二月の掲載句から選句掲載)
- 古見豆人 昭和二十八年(一九五三) 足柄峠 『大富士』第二十三巻第十二号(昭和二十八年十二月号)、二四〜二五頁
- 岩田昌 一九九七 富士紡労働者・矢後利一の生涯 『静岡県近代史研究』第二三三号、三二〜三五頁
- 加納野梅編 昭和七年(一九三二) 新草俳句集 野梅吟社(昭和七年十二月発行『新草』創刊号〜昭和七年八月号より選句掲載)
- 前田岳人 昭和二十四年(一九四九) 句碑になるまで 『塔』第一巻第十二号(昭和三十四年十一月号)、九〜一〇頁
- 前田岳人 昭和二十七年(一九五二) 足柄吟行 『大富士』第二十二巻第八号(昭和二十七年八月号)、二四〜二五頁
- 前田弥一(岳人) 昭和四十年(一九六五) 自選 岳人句集 私家版
- 松本椿年 昭和九年(一九三四) 各地句座 駿河小山あゆみ句會 『大富士』第四巻第十一号、一九頁
- 松本椿年 昭和四十一年(一九六六) 私の雅号 『みづうみ』第三二二二号(昭和四十一年二月号)、二〇頁
- 松本傳次郎(椿年) 昭和四十五年(一九七〇) 句集 老稚 私家版

田園俳人松本椿年の生涯と作品（七）

- 松本傳次郎（椿年） 昭和五十七年（一九八二） 第二句集 限界 私家版
- 宮川充司 二〇一六 田園俳人松本椿年の生涯と作品―生涯発達心理学の観点から略年譜の試作―『椋山女学園大学研究論集』第四十七号 人文科学篇、四三～五九頁
- 宮川充司 二〇一七 田園俳人松本椿年の生涯と作品（二）―明治大正期から終戦頃までのライフイベントと作品―『椋山女学園大学研究論集』第四十八号 人文科学篇、二三～四〇頁
- 宮川充司 二〇一八 田園俳人松本椿年の生涯と作品（三）―昭和初期から昭和四十年頃（高齡期）までのライフイベントと作品―『椋山女学園大学研究論集』第四十九号 人文科学篇、二一～三六頁
- 宮川充司 二〇一九 田園俳人松本椿年の生涯と作品（四）―昭和四十年代（後期高齡期）のライフイベントと作品―『椋山女学園大学研究論集』第五〇号 人文科学篇、一～二〇頁
- 宮川充司 二〇二〇 田園俳人松本椿年の生涯と作品（五）―昭和三十年代から四十年代（前期高齡期・後期高齡期）のライフイベントと作品補足―『椋山女学園大学研究論集』第五十一号 人文科学篇、一七～二九頁
- 宮川充司 二〇二一 田園俳人松本椿年の生涯と作品（六）―昭和五十年代（超高齡期）のライフイベントと作品―『椋山女学園大学研究論集』第五十二号 人文科学篇、一九～三九頁
- 小笠原龍人編 昭和四十三年（一九六八） 塔創刊十周年記念合同句集 星苑 塔俳句会
- 小笠原龍人編 昭和四十八年（一九七三） 塔創刊十五周年記念合同句集 蒼穹 塔俳句会
- 小笠原龍人 昭和四十九年（一九七四） 句集 孤灯 塔俳句会
- 小笠原龍人編 昭和五十三年（一九七八） 塔創刊十五周年記念合同句集 玲泉 塔俳句会
- 小野虹人 昭和二十二年（一九四七） 二百號記念大會記『大富士』第

十七卷第九号（昭和二十二年九月号）、一二～一三頁
湯山逸素 昭和四十四年（一九六九） 逸素句集 私家版

* 教育学部 子ども発達学科

宮川 充 司

資料一 松本椿年（傳次郎）年譜（改訂二〇二二年完成版）

年月	年齢	出来事
明治二十年 (1887) 七月	誕生	静岡県駿東郡中嶋村の旧家の三男として誕生（七月七日） 父親松本勘太郎（俳号吉野庵禾拾）四五歳、母きく四一歳 義兄紋次郎（俳号竹因）二十六歳、長姉まさ二十歳、 次姉くら十二歳、長兄半治十歳、次兄啓作三歳
明治二十四年 (1891) 十月	四歳	義兄松本紋次郎と長姉まさとに長女りん生まれるが、翌明治 二十五年（1892）一月早世
明治二十七年 (1894) 四月	六歳 六〜七歳 頃の冬	静岡県駿東郡六合村立成美尋常高等小学校入学 父禾拾の句会の折、最初の朝寒の句を口ずさみ喝采 朝寒く茶椀茶碗の水りいし
明治三十一年 (1898) 三月	十歳	静岡県駿東郡六合村立成美尋常小学校卒業 父親より俳号椿年を与えられ、この頃から句作
明治三十二年 (1899) 六月	十一歳	静岡県駿東郡六合村立成美高等小学校進学 妹あき早世
明治三十四年 (1901) 一月	十二歳	同村の山崎伊三郎の養子となる 妹イワ（勘太郎四女）誕生
明治三十五年 (1902) 三月	十四歳	長兄半治室伏まつと婚姻
明治三十九年 (1906) 十月	十九歳	静岡県駿東郡六合村立成美尋常高等小学校卒業 義兄松本紋次郎まさ夫婦、砂山のぶ（明治三十八年二月生 一歳）を養女とする
明治四十年 (1907)	二十歳	富士紡績小工場勤務
明治四十一年 〜 四十二年（1908 〜1909）二月	二十一歳 二十二歳	次兄啓作小野家（生土）に婿養子 六合村生土三十六番地に転居
明治四十三年 (1910) 十月 十一月	二十三歳	山崎伊三郎との養子縁組解消、松本家に復縁 駿東郡北郷村山崎利三郎の次女すみと婚姻入籍 長女イマ誕生

大正二年 (1913) 七月 十一月	二十六歳	生家に近い小山町中島一八番地に転居 次女サク誕生 妹イワ没（行年十五歳）
大正五年 (1916) 一月 七月	二十八歳 二十九歳	長兄半治妻まつ没（行年四十四歳）三男三女をなすがいず れも早世 母きく没（行年七十二歳 老衰）
大正六年 (1917) 九月 十一月	三十歳 三十歳	分家（小山町中島六十二番地に居住） 長兄半治岩田やすと再婚 三女志磨誕生
大正九年 (1920) 二月	三十二歳	長兄半治四男紋地（嗣子）誕生 長兄半治りょうと再婚
大正十年 (1921) 五月	三十三歳	四女みどり誕生
大正十一年 (1922) 二月 四月 十二月	三十四歳 三十五歳	五女愛子誕生 長姉まさ没（行年五十七歳） 父勘太郎没（行年八十二歳）
大正十二年 (1923) 八月 九月 十月	三十六歳	富士紡績小工場労働争議 関東大震災 富士紡績小工場被災 死傷者多数 富望主追悼句会天位（選者服部畠石） 供物たた霊棚の灯の揺らくのみ この頃から本格的に俳句を作り始める 富士紡績小工場 内に俳句部創部『簞』創刊 この頃、加納野梅門下坂本緑村婦村 加納野梅坂本緑村宅 訪問（昭和三年以前） 加納野梅主宰『鬼栗毛』投句
大正十四年 (1925) 三月	三十七歳	長兄半治妻りょう没
大正十五年 (1926) 六月	三十八歳	長兄半治没（行年五十歳）
昭和二年 (1927) 二月	三十九歳	末子（六女）喜美子誕生

田園俳人松本椿年の生涯と作品 (七)

昭和四年 (1929)	一月 四月	四十一歳	加納野梅月刊俳誌『新草』創刊 坂本緑村と投句 古見豆人駿東郡小山町立成美尋常高等小学校長に着任 古見豆人あゆみ吟社創設 古見豆人の推薦で渡邊水巴主宰月刊俳誌『曲水』に投句 『曲水』第十四卷第十号(昭和四年七月号)に初掲載 大藪の明るさ見ゆる辛夷かな 夕風に春行く麥の戦きかな
昭和五年 (1930)	四月 六月	四十二歳	『あゆみ句帖』刊行 小山町立成美尋常高等小学校、小山町立第一尋常高等小学校に改称 昭和天皇静岡行幸 昭幸に就き天覧糸の飾玉を作る ともしれば汗ばめる手を洗いつつ(『新草俳句集』) 古見豆人大富士吟社創設 俳誌『大富士』創刊同人 草庵新築 飾矢の鬼門差しゐる銀河かな(『曲水』第十七卷第三号)
昭和六年 (1931)	十月	四十三歳	富士紡績小山工場退社
昭和七年 (1932)	十月	四十五歳	冬近し 富士紡績社 冬近くそこら蟲なく別れかな(『大富士句帖第一輯』)
昭和八年 (1933)	一月	四十五歳	正月富士登山 雪中富士登山五句『曲水』第十八卷第四号の筆頭を飾る 吹雪く中に御慶かはして消えにけり 末子喜美子小山第一尋常小学校に入学 木の芽 末子入学 広げたる本の匂ひや木の芽晴れ(『大富士句帖第一輯』)
昭和九年 (1934)	九月	四十七歳	石田仏子あゆみ句会初参加
昭和十年 (1935)	一月	四十七歳	この頃から『曲水』への投句休止 義父逝く三句 凍土に放り出したる飾りかな 松とりし穴に立てけり門位牌 霜に立てて折れし線香や笹子鳴く (『大富士』第五卷第三号 昭和十年三月号)

昭和十一年 (1936)	三月	四十八歳	次姉くら没(行年六十三歳)
昭和十二年 (1937)	十一月	五十歳	日中戦争の勃発により甥紋地招集 秋雨を擧手にはじめて征きにけり (『大富士』第八卷第一号 昭和十三年一月号)
昭和十三年 (1938)	四月	五十歳	古見豆人小山第一尋常高等小学校長を退職し、湘南学園(高座郡藤澤町鶴沼)に異動 大富士吟社東京世田谷に移転 豆人先生送別句會 半こげしまま咲満ちし櫻かな (『大富士』第八卷第六号 各地句座 駿河小山 豆人先生別句會四月二日小山第一尋常高等小学校被服室)
昭和十四年 (1939)	一月	五十一歳	初孫光弘誕生(辰雄イマ長男) 孫の尿膝にぬくとし今朝の秋 秋の灯や己がおならに怖ゆる兒 (『大富士』第九卷第十一号 昭和十四年十一月号) 豆人師小山再来訪 搾乳の手を離されず御慶受く(老稚 九頁) (『大富士』第九卷第三号(昭和十四年三月号)光風林三九頁) 日本軍南京攻略 本家甥松本紋地戦死 末子喜美子を松本本家の養女とする 長女イマの配偶者杉山辰雄と養子縁組(松本家嗣子とする)
昭和十五年 (1940)	四月 五月 八月	五十二歳 五十三歳	甥紋地の遺骨と軍刀掃還 戦死せる甥の遺骨を迎えて(二句) 南風 南風や血曇り濃ゆき日本刀 抱く遺骨脈うてるかに南風をゆく (『大富士句帖』第四輯『大富士』第十卷第八号) 孫京子(辰雄イマ長女)誕生

宮川 充 司

昭和十六年 (1941) 二月 四月	五十三歳	次女サク婚姻 『大富士』第十一卷第四号への投句を最後に投句休止 父八十六歳生前墓碑を建つ(二句) 冬風の入日ににじめり朱入文字 冬風や己が石碑にぬかづける 十二月のれんげ咲きけり霜の中
昭和十七年 (1942) 二月	五十四歳	孫奈美江(辰雄イマ次女)誕生
昭和十八年 (1943) 十一月	五十六歳	義兄紋次郎没(行年八十六歳)
昭和十九年 (1944) 二月	五十六歳	孫光弘早世(行年六歳)
昭和二十年 (1945) 二月 八月 十二月	五十七歳 五十八歳	三女志磨婚姻 第二次大戦終結 次兄啓作没(行年六十一歳)
昭和二十一年 (1946) 一月 四月	五十八歳	俳誌『大富士』復題第十六卷第一号 孫典彦(辰雄イマ次男)誕生(二月八日) 四女みどり婚姻
昭和二十二年 (1947) 一月	五十九歳	『大富士』投句再開 うら、かや米庫に積む疎開の荷 『大富士』第十七卷第四号(昭和二十二年四月号) 大富士句帖(古見豆人選)
昭和二十三年 (1948) 五月	六十歳	末子喜美子、山崎栄と婚姻(松本家の嗣子とする) 駿河小山にて大富士二百号記念大会 迎火や静かに昏るる湖の色 『大富士』第十七卷第九号(昭和二十二年九月号)
昭和二十四年 (1949) 四月	六十一歳	この年QHGによる大富士の検閲緩和 外孫卓美(本家松本栄・喜美子長男)誕生 内孫時男(辰雄イマ三男)誕生

昭和二十五年 (1950) 九月	六十三歳	外孫幸久(本家松本栄・喜美子次男)誕生
昭和二十六年 (1951) 十一月	六十四歳	五女愛子坂本薫と婚姻(石田仏子夫妻が仲人)
昭和二十七年 (1952) 三月	六十四歳	『大富士』への投句再開 除夜の鐘時計を捲いて座に戻る 日は午なり御慶着のま、牛に餌を
昭和二十八年 (1953) 七月	六十六歳	古見豆人師が参加した、大富士足柄支部ダリヤ浴衣青田句會時鳥廻吟に参加 時鳥夜更の峯に何の灯ぞ
昭和二十九年 (1954) 二月	六十六歳	『大富士』第二十四卷第二号への投句再開 老後 まだ餅をつき得る力ありにけり 凶作の田面ともなし初日の出 足柄峠古見豆人句碑除幕式記念句會(五月二十三日) 富士からの薫風句碑の座を巡る
昭和三十年 (1955) 五月	六十七歳	外孫伊佐子(本家松本栄・喜美子長女)誕生 妻すみ逝去(行年六九歳) 老衰 老妻没す 三句 うなづけど目はうつろなり南風に灯す 子の孫の泣くを制して南風に佇つ 師よりの悼句南風の線香つぎ足しぬ
昭和三十一年 (1956) 三月 五月	六十八歳	湯山逸素細道會を起こし、俳誌『細道』創刊 妻すみ一周忌 辛夷咲くや畑尻にある楸二丁(句集「老稚」七一頁) 『大富士』第二十六卷第七号(昭和三十一年七月号大裾野) 身なる妻燕の巢見上げけり 『大富士』第二十六卷第八号(昭和三十一年八月号大裾野)

田園俳人松本椿年の生涯と作品（七）

昭和三十三年 (1938) 二月	七十歳	昭和三十三年 (1938) 四月	六十九歳	七月	六十九歳
大富士小山支部湯ヶ原旅行（二月八日九日） 潮芥寄せて正月あざみ咲く（句集「老稚」二頁冒頭第一句） 『大富士』第二十八卷第四号 昭和三十三年四月号 支部 精進情報 小山支部 岳人報） 外孫（四女みどり三男孝光） 早世 古見豆人没（十一月二十二日花石菖忌） 俳誌『大富士』第二十八卷第十一号（昭和三十三年十一月号）をもって廃刊	迎え盆 一と筋の草風立てり門火焚く 『大富士』第二十六卷第十一号 昭和三十一年十一月号 大裾野） 古見豆人師大富士小山支部来訪、柳島公民館記念句会、入学柳句会竹落葉廻吟 滝壺の暗き光や竹落葉 『大富士』第二十七卷第六号 昭和三十三年六月号支部 精進情報 駿東郡小山柳島支部 四月二十日）	昭和三十三年 (1938) 八月	七十五歳	昭和三十七年	七十九歳
小笠原龍人『大富士』の後継誌として『塔』創刊 この年の内に『塔』同人として参加 俳誌『塔』第一卷第十一号豆人先生一周忌追悼号 追憶 とろ、飯亡き師の記録十二腕 豆人先生一周忌追悼俳句大会 十一月廿二日 池上曹禪寺 豆人忌の廻吟に追われ蜜柑むく	乳牛の出産 土用照臨月近き牛の息 『みづうみ』第二七三号 昭和三十三年十月号 みづうみ俳句）	昭和三十五年 (1960) 十月	七十三歳	昭和三十六年 (1961) 一月	七十三歳
原田濱人籠坂峠句碑建立 句碑除幕式に湯山逸素の誘いで列席	原田濱人主宰の『みづうみ』参加 植ゑ進む苗木苗木の陽炎へる 括り柔解けて陽炎さかんなる （『みづうみ』第二五六号 昭和三十六年五月号）	昭和三十八年 (1963) 十二月	七十六歳	昭和三十九年 (1964) 一月	七十六歳
義弟事故死 入寂の足の硬ばり北風す （『みづうみ』第二八九号 昭和三十三年二月号） 夜の落葉悲報に急ぐ道細く 風に狂ふ木の葉の中を極細く 昨日埋めし墓なれ木の葉はやためて （『塔』第六卷第二号 昭和三十三年二月号）	昭和三十九年 (1964) 三月	七十七歳	昭和三十九年 (1964) 七月	昭和三十九年 (1964) 十一月	七十七歳
内孫京子婚姻 とつぐ娘の門出初東風めぐる石 （『塔』第六卷第三号 昭和三十三年三月号） 仏だんの春灯に震え角かくし 春寒や嫁ぎゆく娘の別れ言 （『塔』第六卷第六号 昭和三十三年六月号） 湯山素鷗没（三月十一日素鷗忌） 喜寿の祝 七夕の笹影に居て喜寿の膳 （『みづうみ』第二九七号 昭和三十三年十月号） 初曾孫（内孫京子長男）誕生 （『みづうみ』第三一〇号 昭和四十一年十一月号） 湯山素鷗一周忌追善句会 素鷗忌の句碑にゆらゆら花の影 花冷や句碑にたつぷり手向け酒 （『みづうみ』第三一〇号 昭和四十一年十一月号） 内孫奈美江婚姻 光り合うて二尾の若鮎瀬を遡る （『みづうみ』第三一〇号 昭和四十一年十一月号） 初曾孫初節句 庭若葉笑いおほへし児を腕 （『塔』第七卷第八号 昭和四十一年八月号） 尾を富士へ箱根へ振って鯉幟 （『塔』第七卷第九号 昭和四十一年九月号） 前田岳人『自選 岳人句集』刊行 嗣子辰雄病没（行年五九歳 九月二十二日没） 嗣子淋巴腺肉腫にて逝く 秋冷の耳寄せ聴くや吾子の声 （『みづうみ』第三一二号 昭和四十一年一月号）	昭和四十一年 (1966) 三月	七十七歳	昭和四十一年 (1966) 四月	昭和四十一年 (1966) 五月	七十八歳

昭和四十一年 (1966)	一月	七十八歳	菩提寺勝福寺住職突如入寂 明けきらぬ山門凍ての固き踏む 〔塔〕第八卷第五号 昭和四十一年五月号 豆人先生句碑の除幕 五月八日ゆかり深き金時神社にて 献詠句(大富士句碑) 秋晴や水に影もゆ社の朱 〔塔〕第八卷第七号 昭和四十一年七月号 大島旅行 梅雨日眩しあんこと並び撮られ居て 〔みづうみ〕第三二二号 昭和四十一年十一月号 二人目の曾孫(内孫京子長女) 誕生
昭和四十二年 (1967)	十月 十二月	八十歳	親族事故死(十二月二十八日) 元日や床に据えたるお骨壺 〔塔〕第十卷第六号 昭和四十三年六月号 会葬者揃う間庫裡のストープへ 葬り来て浄めの手塩餅に入む 〔みづうみ〕第三四二号 昭和四十三年七月号
昭和四十三年 (1968)	九月 十一月	八十一歳	塔俳句会『塔創刊十周年合同句集 星苑』刊行 初曾孫袴着 袴着の拍手小さく響きけり 〔塔〕第十一卷第二号 昭和四十四年二月号
昭和四十四年 (1969)	八月 九月	八十二歳	三人目の曾孫(内孫奈美江長男) 誕生 四人目の曾孫(内孫京子次男) 誕生 『句集 老稚』出版
昭和四十五年 (1970)	四月 十一月	八十二歳 八十三歳	病床の原田濱人を門弟と見舞う 師をかこみ小春の障子開けて撮る 手に残る師の握力や小春風 〔みづうみ〕第三七五号 昭和四十六年四月号
昭和四十六年 (1971)	四月	八十三歳	父松本勘太郎(俳号吉野庵禾裕)の句碑松本本家に建立 初日の出月をうしろに拝みけり 禾裕 冬晴の句碑自宅前庭に建立 冬晴や底凜さやかに動き居り 椿年

五月	昭和四十六年 (1971)	八十四歳	菩提寺勝福寺新任職晋山式 晋山の経に天風来て薫す 〔塔〕第十三卷第十二号 昭和四十六年十二月号
昭和四十七年 (1972)	七月	八十五歳	小山町大水害(七月十二日) 田も畑も川原となりて虫すだく 決潰のダム底幽し尽の虫 〔塔〕第十五卷第四号 昭和四十八年四月号 参道の洩日地にしむ法師蟬 〔みづうみ〕第三九五号 昭和四十七年十二月号 五人目の曾孫(内孫奈美江次男) 誕生 芹沢風外没 法師蟬水さびてゐる墓茶碗 伊勢団体バス一泊旅行 宿の卓仏子と二人十三夜 〔みづうみ〕第三九八号 昭和四十八年三月号
昭和四十八年 (1973)	三月	八十五歳	前田岳人没 行年八十七歳(三月二十八日) 次に逝くは吾かも春の雲仰ぐ 花冷えの土かけて永遠の別れかな 〔みづうみ〕第四〇二号 昭和四十八年七月号
昭和四十九年 (1974)	九月	八十六歳	塔俳句会『塔創刊十五周年合同句集 蒼穹』刊行 六人目の曾孫(内孫奈美江長女) 誕生 赤児見に草餅搗いてそばもつて 〔みづうみ〕第四一二号 昭和四十九年五月号
昭和四十九年 (1974)	一月	八十六歳	米寿の祝 子孫曾孫うらかに顔を揃えけり 〔塔〕第十六卷第八号 昭和四十九年八月号
昭和四十九年 (1974)	四月 九月	八十七歳	石田仏子和光市に転居 五月十九日中島公民館で送別句会 家督を嫡孫典彦に譲る 孫にゆずる登記すまし月涼し 〔塔〕第十六卷第十一号 昭和四十九年十一月号

田園俳人松本椿年の生涯と作品（七）

昭和五十二年 (1977)	昭和五十一年 (1976)	昭和五十年 (1975)	十二月
三月 五月	一月	六月	
八十九歳	八十八歳	八十七歳	
内曾孫のお喰い初めと初節句 春の月兒に喰ひそめの茶碗買ふ 〔塔〕第十九卷第九号 昭和五十二年九月号 よちよちと庭に出し児や鯉職 〔塔〕第十九卷第八号 昭和五十二年八月号 卒寿の祝い 卒寿兒五月の風に吹かれ立つ 〔みづうみ〕第四五一号 昭和五十二年八月号 竿頭欄 中川温泉旅行 温泉窓開ければ聞こゆ河鹿の音（中川温泉） 〔塔〕第十九卷第十号 昭和五十二年十月号 葦山旅行 秋風へでんと大白据へてあり（江川代官屋敷四句） 〔塔〕第二十卷第一号 昭和五十三年一月号	みづうみ小山支部による松本椿年翁米寿祝賀句会 藤曲公民館（十二月一日） 霜濃ゆく降りしゆふべの焚火跡 〔みづうみ〕第四二二号 昭和五十年二月号 小山支部 〔松本椿年翁米寿祝賀句会の記）		
十月	十月	九月	十一月
九十歳		八十八歳	
	曾孫がさらに増える年となる また一人曾孫が増えたる年迎ふ 〔塔〕第十八卷第五号 昭和五十一年五月号水煙集 同人作品）	原田喬俳誌『権』創刊に同人参加 植うる田の一角富士の雲落とす 電蒼く解けつつ草の根に溜る 会葬者老人多し栗の花 〔権〕第一号創刊号 昭和五十年九月 権集） 孫典彦婚姻 静岡県知事杯賜杯 いみじくも知事杯賜う天高し 〔塔〕第十八卷第二号 昭和五十一年二月号）	

昭和五十七年 (1982)	昭和五十六年 (1981)	昭和五十五年 (1980)	昭和五十四年 (1979)	昭和五十三年 (1978)
四月 八月 九月	五月 六月	四月 五月	四月 十二月	十月
九十四歳	九十三歳	九十二歳	九十一歳	九十一歳
『第二句集 限界』出版 石田仏子句集『花筏』没後出版 湯山逸素没 行年九十二歳 忌の塔婆枝に坂道つゆけしや 〔塔〕第二十五卷第二号 昭和五十八年二月号 塔俳句）	隣町御殿場市でみづうみ探鳥句会選者の一人となる 富士は雪厚く残して五月尽 〔みづうみ〕第四九九号 昭和五十六年八月号 みづうみ探鳥句会） 勝福寺にて岩田柴人・小野虹人の追悼句会（六月十日） 追悼の句もなく梅雨の忌に侍る 〔みづうみ〕第四九九号 昭和五十六年八月号） 石田仏子没（九月十八日）行年七十四歳 石田仏子追善句会（小山町生土 乗光寺） 墓と言うも草に露けき石ひとつ 〔みづうみ〕第五〇四号 昭和五十七年一月号）	曾孫の一人小学校入学 一年生帰りましたと大声に 〔みづうみ〕第四八五号 昭和五十五年六月号） 『みづうみ』第四八四号（昭和五十五年五月号）に「松本椿年句集より」の記事掲載	打ち返す土黒々と夕烟 〔みづうみ〕第四七三号 昭和五十四年六月号 支部句会報 みづうみ小山支部句会四月例会 沐人報 四月十四日 於菅原千代女居） 夙や三日月ふわと飛びそな（『限界』） 〔みづうみ〕支部句会報 みづうみ小山支部句会十二月例会 沐人報 十二月八日 於菅原千代女居）	『塔』創刊二十周年合同句集（第三集 玲泉』四十句掲載 山梨旅行 葡萄熟れて勝沼の空日々澄む 〔みづうみ〕第四六八号 昭和五十四年一月号）

宮川 充司

昭和五十八年 (1983) 十月 十一月	九十六歳	俳誌『みづうみ』岳麓秋の句会（一日足柄峠回吟、二日麓の宿山久荘で句会選者となる） 『みづうみ』への投句絶筆 麦の塵焼く火夜更けを明滅す （『みづうみ』第五二六号 昭和五十八年十一月号竿頭欄） 俳誌『椎』百号記念号 昭和五十八年十二月号 特集青北風集作家作品）に十句掲載
昭和五十九年 (1984) 一月	九十六歳	俳誌『塔』投句絶筆 柿一つ落ち残りいて年を越す （『塔』第二十六卷第二号 昭和五十九年二月号 昭和五十九年新春賀句）
九月	九十七歳	俳誌『椎』投句絶筆 夏めける空を編みをり朝の蜘蛛 薫風や名なき一瀑木々を打つ この土地の清水はみんな富士よりす （『椎』第九九号 昭和五十九年九月号 青北風集）
十月		外孫（四女みどり次男）結婚 いwash雲縫って舞い行く番い鳥
十一月		初曾孫（内孫京子長男）成人の祝い 祝吟 大木となるも一つの実からなる
十二月		岩沢露萩追善句会 十二月九日 於小山町菅沼甘露寺
昭和六十年 (1985)十二月	九十八歳	十四人目の曾孫誕生（四女みどり次男の長女愛）
昭和六十一年 (1986) 二月	九十八歳	行年百歳にて逝去 椿山壽年居士 絶吟の句 春風に乗つてゆかばや句の行脚